

1席	小説	副島 和昌	シーグラス
2席	小説	青木 香澄	明日の景色
3席	小説	中村 智子	伊万里も夢
秀	小説	生野 鶴三	父の足跡
秀	小説	松尾 升子	胎動
1席	随筆	伊藤 恵子	カレーうどん
2席	随筆	中林 なみ	豊子さん
3席	随筆	草場 美佐子	介護 さまざま物語
秀	随筆	釈 天愚	死ぬのがこわい
秀	随筆	横尾 信雄	平穩死のすすめ
秀	随筆	田中 希彦	愛路日賛歌
1席	詩	徳永 浩	某所における存在理由
2席	詩	筒井 孝徳	サナトリウム
3席	詩	岡本 なお美	雨
秀	詩	桑田 窓	春
秀	詩	大月 みや	嘘
秀	詩	小柳 八束	ふわふわと ゆらゆらと
1席	短歌	野中 暁	被爆せしマリアの像の殺げし頬告げむとしたるこゑを聴きをり
2席	短歌	岩永 姜子	プラスチックの製品溢れる便利さが海の魚に汚染及ぼす
3席	短歌	筒井 孝徳	わが臍に服ませし薬と呑む酒とおなじ夢路を辿りてねむる
秀	短歌	北 祐二郎	ははそばの母の着物の土用干し四季の花々一気に咲く
秀	短歌	蓮把 和歌子	神宮の森に送りし学徒兵ペンを銃剣に散りし若者
秀	短歌	太田 すえみ	風渡る春の畑の声を聞く絹莢さやさや小さく光りて
秀	短歌	池田 照美	背泳ぎが出来たら鮎になれるやも齢十五の青き清流
秀	短歌	小森 澄子	生命が呼吸し合ふとふ陸と海水俣に添ひし石牟礼道子
秀	短歌	釈 天愚	孔雀尾羽根ひろげて震ふ魂に月光の差す藍ふかぶかと
秀	短歌	松尾 光子	友だちのままでいようと別れたるあの山畠に君も老いづく
秀	短歌	櫻井 則子	この丘に佇てば拳手なす征きし日の兄の面輪に雲の近付く
秀	短歌	古賀 萬亀子	平成の最後の夏も安からず地震水害原発の悲惨
秀	短歌	御塚 賢三郎	戦時下に産声あげしこのいのち父さん母さんまだ元気だよ

秀	短歌	横尾 信雄	ユーモアの源泉は哀愁である我が呟きもそこへ照準
秀	短歌	一ノ瀬 ひとみ	銀杏の葉風が吹くたび舞い散りて見上げる稚児の烏帽子が光る
秀	短歌	大月 みや	白玉の黒蜜は甘くて苦いので人生のようだと君は呟く
秀	短歌	吉村 都子	梅雨寒に重ねし亡夫のカーディガンかすかに煙草の匂いが残る
秀	短歌	平田 敏子	大口で風を呑み込む鯉幟でっかい夢を尾びれで描く
秀	短歌	山口 須美	悔い残し夜の厨に研ぐ米のこめは小さき祈りのかたち
秀	短歌	白水 昌宏	群青の空に銀河は流れきて野営は浄土吾が坊がつる
1席	俳句	おおや はな	青き枇杷ジャズの流るる駅舎裏
2席	俳句	川村 弘子	父母の浄土へ兄も夏つばめ
3席	俳句	宮島 幸子	一日を生き足りしかな花木槿
秀	俳句	米倉 文音	かへらざる胎児の鼓動原爆忌
秀	俳句	福田 稔子	杵島曲唱し媪は蕨摘む
秀	俳句	福地 子道	お花畑池塘の白馬青々と
秀	俳句	大石 ひろ女	硯海の真水の匂ふみどりの夜
秀	俳句	上野 鷹司	婚家にも馴れ村になれ水盗む
秀	俳句	田原 静子	初秋の旅するごとく転院す
秀	俳句	松尾 さなえ	かなかなや峠越ゆれば母の里
秀	俳句	吉富 綾子	残り飯おにぎりとする終戦日
秀	俳句	香月 房子	子の丈に屈みて稲の花を見る
秀	俳句	高木 秀夫	茎太き蕨揃ふや祖父の籠
1席	川柳	横尾 信雄	明日を向く男の粋な腕まくり
2席	川柳	佐藤 久仁子	育てるっていいね希望が湧いてくる
3席	川柳	小柳 湛子	終活へ喜劇で幕を降ろしたい
秀	川柳	岩永 りつ子	気迫ある握手だ貴方信じよう
秀	川柳	西山 英徳	サービスが過剰で悩むごみの山
秀	川柳	石本 洋子	特売日今日も女の腕が鳴る
秀	川柳	松尾 雅子	素直ならちゃんと届くよ愛のムチ
秀	川柳	角田 幸美	帰省子へ畑の野菜よく笑う
秀	川柳	江川 寿美枝	胎動は確と新元号の音
秀	川柳	大塚 則子	菜園も衣替えです土起こす
秀	川柳	真島 久美子	自信などないが視線は逸らさない
秀	川柳	千葉 みどり	採決の惰性が怖い多数決

秀	川柳	江頭 漳二郎	AIに熟練の技乗っ取られ
秀	川柳	山口 亮栄	有明の海がいのちを問うている
秀	川柳	南里 澄子	職退いておんなに戻るこぼれ萩
秀	川柳	片山 サエ子	口達者だけを主治医が誉めてくれ
秀	川柳	荒川 松代	ケチでない勿体ないと思うだけ
秀	川柳	西川 邦英	ライバルに今なら言えるありがとう
秀	川柳	真島 美智子	たんたんと生きる三度の飯を食う
秀	川柳	飯盛 正恒	笑い転げ余命を延ばす佐賀にわか

※ 川柳秀作の「西川邦英」様の「邦」の字は、篇の部分が上につき抜けていない文字です